

日本語動詞の活用体系

雑誌名	日本語科学
巻	4
ページ	7-30
発行年	1998-10
URL	http://doi.org/10.15084/00001997

日本語動詞の活用体系

ハイコ・ナロク

(北海道大学)

キーワード

形態論, 日本語動詞, 活用体系, 形態類型論

要旨

現代日本語の動詞の活用・派生体系にどのような語形を含めるべきか、そしてその語形はどのような構造をもつかについては様々な説がある。本稿では、実現された形態にもとづき、特定の理論的枠組みに依存しない、かつ誰もが検証可能と思われる方法を用いて、動詞の活用・派生体系の分析を試み、そこから「活用語尾」と「活用語幹を派生する接尾辞」が活用・派生の中心的な要素であると結論づける。また、連続動詞や複合動詞は、活用・派生体系には直接属さないが、その周辺にあるものとして位置づけられる。この活用語形の構造分析は多くの文法理論で使用できると考える。最後に、同じ方法を他言語の動詞の形態分析に応用し、動詞形態の比較をおこなう。

0. はじめに

他の多くの言語と同じように、日本語の文法を中心をなしているのは動詞である。統語論的には、動詞は文の主な要素を支配、統合する役割を担うが、形態論的にも、態、アスペクト、テンス、モダリティ等、多くの文法範疇の標識が動詞に集中する。動詞の形態が他の品詞より複雑となるのはこのためであり、形態記述において動詞は他の品詞以上に重要である。本論文は、動詞の形態的構造、特に動詞の活用・派生体系はいかなる語形を含み、その語形はどのような要素から構成されるかを明らかにしようとするものである。

文法における形態記述は、言葉の構造(つくり)と機能(はたらき)を正確に反映したものでなければならない。例えば、動詞「よむ」の四つの形「ヨメバ、ヨンダラ、ヨムト、ヨムナラ」について記述する場合、四者が機能的に類似していることを示すだけでなく、音韻表記にもとづいてそれぞれ異なる構造を持つことも示さなければならない。ある文法書が、この四者の構造上の違いを示すだけであったり、機能上の類似から四者を構造上も同類であるとしたりしたら、それは構造または機能のいずれか一方に片寄った記述であり、形態記述としての役割を十分に果たしていないとみなされよう。

形態記述は構造と機能の両面に関わるものであるが、本論文でおこなうことは、そのうちの構造レベルに関する記述でしかない。しかし、このレベルについても、先行研究における記述は様々であり、またその際、それぞれどのような方法論のもとで、どのような手続きを経てその結論に達したかは必ずしも明らかにされていないようである。そこで、本論では、構造レベルに限定し

て分析の手順を明らかにし、どのような方法論をもってすればより正確な結果が得られるかについて考察する。最終的な分析結果自体は従来のものと大差ない。しかし、本稿の重点は、妥当な結果に達するための方法と手続きの提示にあり、また、方法論に関しても、誰もが客観的に検証できる分析を追求する。また、議論に際しては、特定の理論的枠組みを前提とすることをできるだけ避け、多くの文法モデルで広く使えるような分析を提示するよう心がけた。なお、考察にあたっては、従来の形態論を参考にし、批判的にとりあげた。

このような目標を達成するため、以下では次のような順序で議論をおこなう。まず、どのような語形を動詞の中心的な活用・派生体系に含めるべきかを論じる（第1節）。次に、中心的な活用・派生体系に属すると考えられる語形の内部構造を分析し、その構成要素が派生要素、活用要素のいずれであるかを検討する（第2節、第3節）。ついで、形態論と音韻論の境界で生ずるサンディー現象の扱い（第4節）について論じた後、本論における分析の結果を示す（第5節）。そして、語形要素が文法のどのレベルで定義されるべきかについて補足的な議論をおこない（第6節）、最後に、比較・類型形態論的な研究への応用の可能性について述べる（第7節）。ある形態記述が意味を持つためには、できるだけ多くの言語に応用できるものでなければならないと考えるからである。

1. 動詞の活用・派生体系

まず、動詞の活用と派生（すなわち動詞の中心的な諸語形）のパラダイムを構成する付属的要素である「活用語尾」と「派生接尾辞」について分析する。

何が動詞の中心的な活用形・派生形であるかについては、研究者によって大きく意見が分かれる。例えば、動詞「よむ」の次の語形はほとんどの文法書において、動詞の活用形または派生形とみなされている。

I : yomu, yome, yomoo, yonda, yomanai, yomimasu

これに対し、一部の文法書では次の語形も「よむ」の活用形・派生形としてあげられている。

II : yomudaroo, yomuto, yomuna, yondeiru, yomihazimeru, yomiowaru, yomiau, yomurasii, yomusooda, yomuhazuda, yomumonoda, yomonoda

I にあげた語形は以下の共通点を持っている。

- 1) 語彙的語幹（動詞「よむ」の語幹）をただ一つだけ含む。
- 2) 文においてただ一つの統語論的単位を構成する。（他の語を途中に入れたり、途中でポーズを入れて読んだりできない。）

途中にポーズを入れられない統語論的単位を学校文法では「文節」と呼ぶが、ここでは文の直接構成要素として暫定的に「語」と呼ぶ。

これに対し、II の語形は三つのグループに分けられる¹⁾。

II a : 語彙的語幹一つ、「語」一つ

yomu-daroo, yomu-to, yomu-na, yomu-rasii, yomu-soo da, yomu-no da

II b : 語彙的語幹二つ、「語」一つ

yomi-hazimeru, yomi-owaru, yomi-au

II c: 語彙的語幹二つ, 「語」二つ

yonde iru, yomu hazu-da, yomu mono-da

II a の語形は I であげた語形とただ一点で異なる。つまり, これらの語形は, 統語論的に独立できる語に統語論的に独立できない後続要素がついている。例えば, yomu だけでも単独で使うことができ, それに daroo, to, na 等をつけてもただ一つの統語単位しか構成しない。daroo, to, na のような統語論的に独立できない要素を「助詞」と呼ぶ (daroo などのいわゆる「助動詞」の一部もここに含める)。I と II a の語形については次節でより詳細に分析する。

II b の語形は二つの語彙的語幹を含む。つまり, 動詞「よむ」の語形「ヨミ」に動詞「はじめる」「おわる」「あう」がついて複合動詞を構成する。このような語形は類型的には活用でも派生でもなく複合である (Matthews 1991:82参照)。長嶋 (1997:221) の複合動詞の分類によると, 「はじめる／おわる」「あう」は, 他の動詞に後接して複合動詞を構成する場合はそれぞれ「動作の起こり方」「動作の方向」を表すが, いずれの場合も, 複合動詞を構成する動詞の意味関係は対等ではなく, 後項動詞の語彙的意味は完全には保たれない。この意味では, II b の語形は活用, 派生と通ずるところもある。しかし, 類似の現象は他の言語でも見られるので², 前項動詞と後項動詞の意味関係が対等でないことは, II b の語形が複合ではなく活用・派生であるとする根拠にはならない。

また, 日本語においては, 複合動詞による語彙的要素の複合はきわめて生産的である。「動作の起こり方」のうち「開始」「完遂」を表すものだけを見ても, 「～はじめる」「～おわる」「～かかる」「～だす」「～あげる」「～きる」「～はてる」などがある。もし「よみはじめる」「よみおわる」などを「よむ」の活用形または派生形とすると, これ以外の複合動詞も同じ扱いをしなければならぬ。そうなると, 基本的に量的な限界のない語彙の領域にふみこむことになる。したがって, 活用・派生体系の合理性という観点から見ても, 複合動詞は活用・派生体系の一部とはみなさないのが妥当である³。

II c における yonde iru は II b の語形 (複合動詞) と同様, 二つの語彙的語幹を含んでいるが, II b とは異なり, それぞれの語形は統語論的に独立している。「よんではいる」「よんでもいる」のように取り立て助詞をはさみこめることは, yonde と iru の間に統語論的な境界が存在することを示している。よって, 「よんでいる」「よんでいた」などは, 活用形でも派生形でもなく, 統語的構造体とすべきである。バイビー (Bybee 1985: 11, 27) によると, 活用形と派生形は統語的構造体とは区別する必要があるが, その際, 形態論的な拘束性, すなわち一つの単語の中に拘束されているか (活用形, 派生形) いないか (統語的構造体) が決定的な基準となる。また, 「よんでいる」のような統語的構造体は, 類型論的には連続動詞 (serial verb) と呼ばれる。連続動詞については W. フローリーが次のように定義している。

[連続動詞においては] リストのように動詞が並んでいながら一つの文法的単位をなす。(中略) ひとつひとつの構成要素の情報価値が下がっており, ひとつひとつの動詞が個別的な出来事を表さないことが多い。(Frawley 1992:143)

連続動詞は日本語の一つの統語類型であって, 他にも同じような構造をなす動詞がある (例: ～てみる, ～てみせる, ～ておく等)。意味・機能の点では, 連続動詞は, ドイツ語や英語のテンス,

アスペクトや態を表す迂言的な構造（例：独（Ich） habe gemacht. 英（It） has been done.）と部分的に似たところがある。英語などのこれらの構造も二つ以上の活用した（habe/has）、または派生した（gemacht/done）単語からできている。ここでは、「～ている」「～てみる」などの統語的構造体もこれにあたるものとする⁴。

yomu hazu-da と yomu mono-da もそれぞれ二つの語彙要素と二つの統語的単位からなっている。yonde iru の場合とは異なり、二つ目の語彙要素「はず」「もの」は動詞ではなく名詞であるが、yomu hazu-da, yomu mono-da はいずれも統語的構造体であり、動詞の活用・派生体系の一部ではない⁵。

上で引用した、動詞の活用・派生体系に関する一般言語学的な理解にもとづいて、ここでは、動詞語形のパラダイムに含まれる語形は「ただ一つの語彙要素を含み、ただ一つの統語論的単位をなす」という条件をみたすものに限定する。次節では、このような語形について詳細に分析する。

2. 活用と派生

2.1. Word-and-Paradigm モデル

次の語形は、「ただ一つの語彙要素を含み、ただ一つの統語論的単位をなす」という条件を満たしていると考えられる。

yomu, yome, yomoo, yonda, yomanai, yomimasu, yomudaroo, yomuto,
yomurasii, yomusooda, yomunoda

分析には基本的に二つの可能性がある。一つは、これらの統語単位を「語」（または「単語」とみなして、各語の意味・機能を記述し、詳細な内的構造の分析はおこなわないやり方である。ある語形を「基本形」とし、他の語形はその語形から派生したものとして扱う。このモデルの場合、単語の構成要素よりも単語全体が重要とされる。

yomu	=	基本形（非過去）
yomudaroo	=	「よむ」の推量形
yome	=	「よむ」の命令形
yomimasu	=	「よむ」の丁寧非過去形
yonda	=	「よむ」の過去形
:		:

すべての語形は意味や統語機能によって整理され、パラダイムとしてまとめられる。ヨーロッパの伝統文法にもとづくこのようなモデルは、Word-and-Paradigm (WP) モデルと呼ばれる (Matthews 1991:187ff. 参照)。

WPモデルにも様々なバリエーションがある。例えば、次のように、パラダイム内の各語形の比較にもとづき、ある程度の境界線を入れて単語の内的構造を示すこともあるが、その場合も重要なのは語形全体であり、境界と境界の間を形態素として抽出することはしない。

yom-u	=	基本形（非過去）
yom-u-daroo	=	「よむ」の推量形

yom-e	=	「よむ」の命令形
yom-i-mas-u	=	「よむ」の丁寧非過去形
yom-da	=	「よむ」の過去形
:	:	:

純粋な WP モデルの基本的な弱点は、語形の構成要素の詳細な分析、そして各構成要素とその意味的・統語的機能との関係づけをおこなう、あるいはそのための方法論を提供することがない点にある⁶。例えば、上記の語形を例にとれば次のような具体的な問題が指摘できる。

yom-i-mas-u : どの構成要素がどのような機能や意味を担っているのか。例えば、-i- にはどういう機能があるのか。語幹 yom- 以外の構成要素は語尾か派生接尾辞か。伝統的な WP モデルはこの点について明確な分析や分類の方法を提供しない。

yom-da : yom-u の語幹は yom- と yon- の二つがある。同様に、ある動詞では -da がつくところで、他の動詞では -ta がつくこともある。しかし、WP モデルにおいては -da と -ta の形式的（音韻論的）な関係は説明されない。

yom-u-daroo : yom-u 自体は完全な活用語であり、ひとつの統語論的な単位をなす「語」である。しかし、(結論を先に述べれば) -daroo は活用語尾でも派生接尾辞でもない。その点、yom-u-daroo は、英語、ドイツ語、ラテン語の動詞の活用形などとは異なり、それゆえ伝統的な「語」の概念では容易に対応できないと思われる。

また、ラテン語などに比べて語形の構成要素による活用・派生がきわめて規則的な日本語においては、WP モデルのようにすべての語形をパラダイムの形で示すことは簡潔さに欠ける。記述的な観点から見れば、日本語の場合は、構成要素だけのパラダイムをつくり、それらの組み合わせのルールを記述した方が簡潔である。(何を形態論における基本単位と考えるべきかという点については、第6節でもう一度論ずる。)

2.2. Item-and-Arrangement モデル

構造主義の古典的な Item-and-Arrangement (IA) モデルは、記述の基本単位を、語ではなく、語の構成要素とすることで、WPモデルのいくつかの弱点を解決しようとした⁷。つまり、語の内部構造の分析に重点をおくわけである。構成要素は意味、機能、形態ならびに分布をもとに抽出される。同じ意味もしくは機能を持ち、また同じあるいは類似の音韻を持つ、相補的な分布をなす最小の形態的単位は「形態素」と呼ばれる。音韻的に似ているが同一ではないものは、同じ形態素の「異形態」とされる (Matthews 1991: 102ff. 参照)。

このような手続きを、動詞「よむ」「みる」、形容詞「たかい」の以下の語形に適用してみる。

yomu, yome, yomeba, yomoo, yonda, yonde, yondara, yomanai, yomanakatta, yomimasu, yomimasita, yomodaroo, yomanaidaroo, yomuna, yomumai, yomuto, yomanaito, yomuga, yondaga, yomanaiga, yomooga, yomurasii, yomurasikatta, yomusooda, yomunoda, yomunodatta, yomunodaroo, yomareru, yomareta,

yomaseru, yomaseta, yomanakute, yomanakereba

miru, miro, mireba, miyoo, mita, mite, mitara, minai, minakatta, mimasu, mimasita, mirudaroo, minaidaroo, miruna, mirumai, miruto, minaito, miruga, mitaga, minaiga, miyoo, mirurasii, mirurasikatta, mirusooda, mirunoda, mirunodatta, mirunodaroo, mirareru, mirareta, misaseru, misaseta, minakute, minakereba

takai, takakereba, takakute

これらの語形の内部構造は、例えば、次のような語形の対比によって分析できる。(以下、「x:y」は「xとyを比較せよ」、「>」は「次のような分析が導かれる」ということを表す。)

yomu : yome : yomoo : yomeba > yom-u : yom-e : yom-oo : yom-eba

miru : miro : miyoo : mireba > mi-ru : mi-ro : mi-yoo : mi-reba

yonda : yonde : yondara > yon-da : yon-de : yon-dara

mita : mite : mitara > mi-ta : mi-te : mi-tara

このデータから次のようなことがわかる。

- (1) 動詞には、yom-uのように語幹が子音で終わる動詞(子音語幹動詞 Vc)と、mi-ruのように語幹が母音で終わる動詞(母音語幹動詞 Vv)がある。
- (2) 動詞 yom-uの語幹は二つの異形態 yom-, yon-を持つが、動詞 mi-ruの語幹は mi-だけである。
- (3) いくつかの構成要素は音韻上も意味上も異なるが、分布が対照的(contrastive)である。すなわち、「よむ」の場合、-u, -e, -oo, -ebaと -da, -de, -daraはそれぞれ動詞語幹の異形 yom-, yon-につく。これらの対照的な分布を持つ形態はそれぞれパラダイムをなす。
- (4) yom-uとmi-ruには、同じ意味を表す音韻上類似の形態がつく。これらの形態の間には相補的分布の関係が成立するから、同じ形態素の異形態と認める。

ここまでの議論で出てきた形態素は次のようなものである。(-eと-roも機能と分布の側面からして同じ形態素の異形態と認めてもよいが、音韻上の類似性がないので、異なる形態と見なす；{-e}, {-ro}。)

{-u, -ru} (非過去), {-oo, -yoo} (意志), {-eba, -reba} (条件)

{-ta, -da} (過去), {-te, -de} (接続), {-tara, -dara} (条件)

これらの形態素をここでは「A類形態素」と呼ぶ。

また、次の対比を見られたい。

yom-u : yom-udaroo : yom-urasii > yom-u : yom-u-daroo : yom-u-rasii

mi-ru : mi-rudaroo : mi-rurasii > mi-ru : mi-ru-daroo : mi-ru-rasii

yom-u : yom-una : yom-umai > yom-u : yom-u-na : yom-u-mai

mi-ru : mi-runa : mi-rumai > mi-ru : mi-ru-na : mi-ru-mai

yom-u : yom-uto : yom-uga > yom-u : yom-u-to⁸ : yom-u-ga

mi-ru : mi-ruto : mi-ruga > mi-ru : mi-ru-to : mi-ru-ga

yom-u : yom-u-ga : yon-da : yon-daga > yom-u : yom-u-ga : yon-da : yon-da-ga
 yom-u : yom-u-ga : yom-oo : yom-ooga > yom-u : yom-u-ga : yom-oo : yom-oo-ga
 yon-da-ga : mi-taga > yon-da-ga : mi-ta-ga
 yom-oo-ga : mi-yooga > yom-oo-ga : mi-yoo-ga

-rasii, -to, -na, -ga, -maiなどは対照的な分布関係を保ちつつ, {-u, -ru}, {-oo, -yoo}, {-ta, -da}などに後接する。これらの形態は異形態を持たない。これらの形態素を「B類形態素」と呼ぶ。

A類形態素とB類形態素の間には重要な分布上の違いがある。それは、B類形態素は相互に接続可能だが、A類形態素は不可能だということである。(もちろん、B類形態素の相互接続は完全に自由なのではなく、一定の制約に従うものであるが、その詳細は本論の直接的な目的からはずれるので省略する。)

yom-u-mai (B), yom-u-ga (B), yom-u-mai (B)-ga (B)
 yom-u (A), yom-e (A), *yom-u (A) -e (A)

引き続き、次の対比を見られたい。

yom-u-daroo : yom-uno-daroo > yom-u-daroo : yom-u-no-daroo
 yom-u-no-daroo : yom-unoda > yom-u-no-daroo : yom-u-no-da
 yom-oo : yom-u-no-daroo > yom-oo : yom-u-no-dar-oo⁹
 yom-u-to : yom-u-no-da : yomusooda > yom-u-to : yom-u-no-da : yom-u-soo-da
 yom-u-no-da : yom-u-nodatta > yom-u-no-da : yom-u-no-datta
 mi-ta : yom-u-nodatta > mi-ta : yom-u-no-dat-ta

A類形態素につく -soo と -no は分布上B類形態素に属する。また、-da も、A類形態素に直接つくのは dar-oo だけであるが (yom-u-dar-oo, *yom-u-da, *yom-u-dat-ta), 基本的には3つの語幹異形態 {-da, -dar-, -dat-} を持つB類形態素と考える。(このうち -da は単なる語幹ではなく、-dar-u>-da [r-u→φ] という融合によって生じた、全体で動詞の「語幹+A類形態素 {-u, -ru}」の語形に相当する語形と考える。詳細は第5節で述べる。) yom-u-soo da と yom-u-no da ではB類形態素どうしが相互接続されていることになる。

引き続き、次の対比を見られたい。

yom-u : yom-oo : yomareru > yom-u : yom-oo : yom-areru
 mi-ru : mi-yoo : mirareru > mi-ru : mi-yoo : mi-rareru
 yom-areru : mi-rareru > yom-areru : mi-r(?) -areru
 mi-ru : mi-ta : yom-areru : yom-areta > mi-ru : mi-ta : yom-are-ru : yom-are-ta
 mi-ru : mi-ta : mi-r(?) -areru : mi-r(?) -areta
 > mi-ru : mi-ta : mi-r(?) -are-ru : mi-r(?) -are-ta
 yom-are-ru : yomaseru > yom-are-ru : yom-ase-ru
 mi-r(?) -are-ru : misaseru > mi-r(?) -are-ru : mi-s(?) -ase-ru
 yom-u : yomimasu > yom-u : yom-imasu

miru : mimasu > mi-ru : mi-masu

mi-masu : yom-imasu > mi-masu : yom-i(?) -masu

yom-i(?) -masu : yomimasita > yom-i(?) -masu : yom-i(?) -masita

yom-u : yom-i(?) -masu > yom-u : yom-i(?) -mas-u

yom-i(?) -mas-u : mi-masu > yom-i(?) -mas-u : mi-mas-u

mi-ru : mi-ta : yom-i(?) -mas-u : yom-i(?) -masita

> mi-ru : mi-ta : yom-i(?) -mas-u : yom-i(?) -masi-ta

yom-i(?) -mas-u : yom-i(?) -masi-ta > yom-i(?) -mas-u : yom-i(?) -mas-i(?) -ta

mi-ta : yom-i(?) -mas-i(?) -ta : mi-masita > mi-ta : yom-i(?) -mas-i(?) -ta : mi-mas-i(?) -ta

ここにはこれまで扱っていないタイプの構成要素 -are-, -ase-, -mas- が含まれている。これらは語幹とA類形態素の間に入るが、このような要素を「C類形態素」と呼ぶ。C類形態素は、yom-ase-mas-i-ta のように相互接続が可能な点でB類形態素と似たところがある。

上記の語形における問題の一つは、語幹とC類形態素、C類形態素とA類形態素の間に入り、特定の意味または統語的機能を持たない -r-, -s-, -i- (上の表で(?)とした部分) の扱いである。例えば、-i- については次の三つの可能性が考えられる。

[1] -i- はリエゾン母音、つまり意味も機能も持たない挿入辞である。

[2] -i- は後続要素の形態の一部であり、-i- + 後続要素の形態が -i- のない形態と異形態の対をなす。(Kiyose 1995: 66, 鈴木1972: 295 等を参照)

-imas-u/-mas-u, -ita/-ta

[3] -i- は語幹の一部であり、語幹+i- は語幹の異形態である。(Miller 1970:111, Rickmeyer 1995:70f., 鈴木1996:50 等参照)

yomi-, masi-

[1] のように機能も意味も持たない形態素を認めることは、他の可能性がある限り、なるべく避ける。[2] か [3] かの決定には次のような情報も役に立つ。

1) -i- がついた子音動詞の動詞の語幹は統語論的に独立した単位としても機能することがある。(例: 歩み) つまり、-i- は語構成の機能も持つ。

2) -i- がついた子音動詞の動詞の語幹には {-mas-} 以外にも多くの後続要素がつく。(例: yomi-yagaru, yomi-uru, yomi-kaneru)

1) は、-i- が続く形態素とよりも語幹との結びつきが強いことを示す。もっとも、語構成の能力を持つ -i- と語幹と接尾辞の間に入る -i- を別の形態素とみなすことも可能である。しかし、2) を考慮すると、-i- を語幹の一部とみなした方がはるかに合理的といえる。また、この -i- を語幹の一部とみなすのは通時的にも適切である (yomi-mas-u < yomi-mawir.as.uru /*yom-imawir.as.uru)。本論文では、鈴木重幸 (1996:50) にしたがって、-i- で拡張された語幹を「語基」と呼ぶことにする。

mi-r(?) -are-ru や mi-s(?) -ase-ru における -r- と -s- の扱いもやはり三つの可能性があるが、仮に mir- と mis- を語幹の異形態とみなすならば、使役または受動の接尾辞が後続する時にしか使わ

れない特殊な異形態の存在を認めなければならない。したがって、先の -i- とは異なり、-r- と -s- は後続する接尾辞の異形態の一部とみなした方がよい¹⁰。つまり、{-ase-, -sase-} (使役), {-are-, -rare-} (受身)。活用語尾 {-eba-, -reba-} (条件), {-oo-, -yoo-} (意志) における r, y についても同じように考えることができる。

次の対比からも同じ問題が生ずる。

yomu : yomanai > yom-u : yom-anai

miru : minai > mi-ru : mi-nai

mi-nai : yom-anai > mi-nai : yom-a(?) -nai

mi-rare-ru と mi-sase-ru の場合と同様、yom-a(?) -nai においても、-a- を語幹の一部 (yoma-) とみるか後続要素の異形態の一部 (-ana) とみるかという問題が生ずる。しかし、yoma- は語構成の能力もなく、生産的でもないので、-a- は接尾辞 -na- の異形態の一部とみなすのが妥当である。最後に次の対比を見られたい。

takai : takakute : takakereba > taka-i : taka-kute : taka-kereba

taka-i : yom-anai : mi-nai > taka-i : yom-ana-i : mi-na-i

yom-ana-i : yomanakute : yomanakereba

> yom-ana-i : yom-anakute : yom-anakereba

taka-i : yom-ana-i : taka-kute : yom-anakute : taka-kereba : yom-anakereba

> taka-i : yom-ana-i : taka-kute : yom-ana-kute : taka-kereba : yom-ana-kereba

yom-u : yom-u-to : yomurasii > yom-u : yom-u-to : yom-u-rasii

taka-i : yom-u-rasii > taka-i : yom-u-rasi-i

yom-u-rasi-i : yomurasikute > yom-u-rasi-i : yom-u-rasikute

taka-i : yom-u-rasi-i : taka-kute : yom-u-rasikute

> taka-i : yom-u-rasi-i : taka-kute : yom-u-rasi-kute

yom-ana-i : yomanakatta > yom-ana-i : yom-ana-katta

yom-are-ta : yom-ana-katta > yom-are-ta : yom-ana-kat-ta

yom-u-rasi-i : yomurasikatta > yom-u-rasi-i : yom-u-rasi-katta

yom-ana-i : yom-u-rasi-i : yom-ana-kat-ta : yom-u-rasi-katta

> yom-ana-i : yom-u-rasi-i : yom-ana-kat-ta : yom-u-rasi-kat-ta

yom-u : yom-u-ga : yom-ana-i : yom-ana-iga

> yom-u : yom-u-ga : yom-ana-i : yom-ana-iga

yom-u-ga : yom-u-to : yomu-dar-oo : yom-ana-i-ga : yom-ana-ito : yom-ana-idaroo

> yom-u-ga : yom-u-to : yomu-dar-oo : yom-ana-i-ga : yom-ana-i-to : yom-ana-i-dar-oo

このデータからは次のことがいえる。{-na-/-ana-} と {-rasi-} 自体はそれぞれ C 類形態素, B 類形態素に属するが、これらに後接する要素は形容詞 (例えば taka-) に後接する語形要素のパラダイムと同じであり、{-are-}, {-ase-} などに後接する語形要素とは異なる。また、A 類形態素のうち {-ta}, {-tara} は {-ana/-na-} と {-rasi-} に後接する場合は {-kat-} という要素が必要である。

これを「D類形態素」と呼ぶ。

2.3. ここまでの分析のまとめ

ここまでの分析の結果は次のようにまとめられる¹¹⁾。

I. 語幹（拡張された語幹＝語基を含む）に3つの類がある。

- (1) 子音語幹動詞（最大3つの異形態）：(a) yom-, (b) yon-, (c) yomi-（拡張された語幹）
- (2) 母音語幹動詞（語幹1種類のみ）： mi-
- (3) 形容詞 : taka-

II. 活用語尾、派生接尾辞には4つの類がある。

(1) A類形態素（相互接続できない）

Aa類：(1a) (2) の語幹につく。

{-u, -ru} {-oo, -yoo} {-eba, -reba} {-e} {-ro}

Ab類：(1b) (2) の語幹につく。

{-ta, -da} {-te, -de} {-tara, -dara}

Ac類：(3) の語幹につく。

{-i} {-kute} {-kereba}

(2) B類形態素（A類形態素に後接。相互接続可能）

Ba類：Aa類（部分的）とAb類を後接する。

{(-da), -dar-, -dat-}

Bb類：Ac類を後接する。

{-rasi-}

Bc類：A類形態素が後接できない。

{-to} {-mai} {-ga}

(3) C類形態素（動詞語幹（語基を含む）に接続、相互接続可能）

Ca類：Aa類とAb類を後接する。

{-mas-, -masi-} {-are-, -rare-} {-ase-, -sase-}

Cb類：Ac類を後接する。

{-na-, -ana-}

(4) D類形態素（形容詞とBb類、Cb類の語幹につき、Ab類を後接する）

{-kat-}

2.4. 活用語尾と派生接尾辞

上にあげた形態素の形態論的位置と機能を明らかにし、動詞の語形の構造を解明するためには、これらの形態素が活用語尾か派生接尾辞かを決定する必要がある。また、それにより、どのような語形が広義の活用体系に属するかが分かる。

語の内的構造を分析する際には、活用と派生を区別するのが一般的である。活用は、機能的にまた統語論的な単位をなす語形を形成するプロセスであり (Lewandowski 1994:306)、派生は語形成、すなわち語から新しい語を形成するプロセスである (同:21)。活用と派生の区別するパラメータには次のようなものがある (Anderson 1992: 77ff., Matthews 1991: 43ff. 参照)。

〈活用〉

- (1) 活用は品詞変化をもたらさない。
- (2) 活用語尾は統語論的に規定されている。
- (3) 活用は形態的にも意味的にも規則的である。
- (4) 活用は派生より生産的である。(Bybee 1985: 27) の規定では、「活用のカテゴリーは、活用が適用される語幹が文末に現われる時に義務的にマークされる」。
- (5) 活用は派生より語の周辺にある。したがって、活用形は派生のインプットにならない。
- (6) 派生の語形と違って、活用形はパラダイムをなし、すなわち限定された接尾辞の小規模な類をなす (Bauer 1988:83)。

〈派生〉(語形成)

- (7) 派生は品詞の変化をもたらす。cf. (1)
- (8) 派生は形態的にも意味的にも非規則的である。cf. (3)
- (9) 派生は活用より非生産的である。cf. (4)
- (10) 派生は活用のインプットである、つまり派生の形態素は活用の形態素より語幹に近い位置にある。cf. (5)
- (11) 派生された語形はパラダイムをなさない。cf. (6)

バウエルは、(1)～(6) のすべての条件が満たされた場合に「典型的な活用」とし、非典型的な場合は、あてはまる条件によって問題の語形が活用か派生かを決めればよいとする (Bauer 1988: 86)。つまり、活用と派生の境界は連続的である (Bybee 1985: 87)。

A類形態素は (1)～(6) のすべてのパラメータがあてはまるので活用語尾である。

C類形態素とD類形態素も比較的明確である。C類形態素は (3) (6)、そして (9) (10) (部分的に (7) も) のパラメータがあてはまるので、基本的には語形成のための派生接尾辞といえる。(3) があてはまり (8) があてはまらないのは、英語、フランス語、ドイツ語等と異なる日本語の類型論的な特徴によるのである。日本語はこれらの言語より膠着的な要素が多く、接尾辞による派生のプロセスも規則的なことが多い。ここでとりあげている動詞形態体系の派生接尾辞には特にこのことがあてはまる。C類形態素は、動詞の語幹に後接し、また活用語尾を後接するという条件を満たす派生形態素の一下位類にすぎないので、パラメータの (6) もあてはまる。もし名詞などに後接される派生接尾辞も含めるならば、「限定された接尾辞の小規模な類」ではなく、パラメータ (11) にあてはまるような、かなりメンバーの多い類となる。

D類形態素 -kat- は、(3) そして (7) (9) (10) のパラメータがあてはまるので、基本的には、形容詞 (Ac 類の形態が後接して活用する) ならびに Bb 類、Cb 類の語幹に後接し、Ab 類の形態素の接続形となる新しい語幹を形成する派生接尾辞といえる。

最も分類が困難なのはB類形態素である。B類形態素は、基本的には(2)(3)そして(9)(11)のパラメータがあてはまり、Ba類は(7)も、またBb類には(10)もあてはまる。しかし、B類形態素は派生・活用がすんだ語に後接し、その意味で拘束は派生接尾辞より弱い。中には-ga(例：が、しかし)のように独立で使えるものもある。ここでは、B類形態素は活用語尾でも派生接尾辞でもないとする。本論で「助詞」と呼ぶ、印欧語にないこれらの形態素が動詞についての語形全体を規定するには、「語」と違う用語が必要になる。ここでは、リックマイヤーにしたがい、そのような語形を「語句」と呼び、「語句」の中心をなす、活用があり単独で使える語形(例えば、yom-u-gaにおけるyom-u)は「(単)語」と呼ぶ。

3. 日本語の動詞活用における語構成要素の種類と位置

上の分析で得られた語形要素のうちでどれが動詞の活用・派生体系、つまり広義での動詞の語形変化を構成するのだろうか。

一般的に動詞語形の体系の中心をなすのは動詞に活用語尾(f)がついた形であり、ここでの議論では、Aa類ならびにAb類の形態素がついた語形がそれにあたる。(Ac類は動詞の活用体系ではなく、形容詞の活用体系に属する¹²⁾。

動詞の活用・派生体系に属するもうひとつの要素は、動詞の語幹に後接し、活用する動詞の新しい語幹をなす派生接尾辞であるC類形態素のパラダイム(また、その接尾辞を後接した動詞の語形全体のパラダイム)である。C類形態素は、動詞の活用語尾が後接するか、形容詞の活用語尾が後接するかで、「動詞型接尾辞」(v)と「形容詞型接尾辞」(a)に分かれる。(D類形態素-kat-は形容詞の語幹に後接するので、動詞活用体系に直接属さない。)動詞型接尾辞(v)は、さらに活用が子音語幹動詞と同じもの(v_c)、母音語幹動詞と同じもの(v_v)に分類できる(これらの表示はRickmeyer 1995にもとづく)。もし、後接の接尾辞がyomi-kataの-kataのように、活用しない品詞の場合は、その接尾辞は動詞の活用・派生体系を構成する要素に属さない(または語形全体が動詞の活用・派生パラダイムに属さない)ことになる。

本論において「助詞」(p)と呼ぶB類形態素は基本的には活用・派生体系に属さない。これらの接尾辞は既に派生・活用がすんだ語に後接する。ただし、Ba類とBb類は、「語」のレベルではなく、「語句」のレベルで活用する語幹を構成するので活用・派生体系を形成する構成要素といっしょに扱う必要がある。語句のレベルで動詞の語幹を派生するBa類の助詞は「動詞型助詞」(pv)と呼び、Bb類の助詞のように語句のレベルで形容詞の語幹を派生する場合は「形容詞型助詞」(pa)と呼ぶ。

(以下、語形を要素に分解する場合は、語幹と活用語尾の境界を「・」、語幹と接辞の境界を「.」、語と助詞の境界を「=」、複合語の語彙素と語彙素の境界を「-」で示す。)

4. サンディー現象

ここまでの議論では、語構成要素の境界に生ずる形態音韻論的な問題についてはまだ論じていない。例えば、yom-とyon-や-teと-deは音韻と意味・機能における類似性から同じ語彙素(形

態素)の異形態であるとしたが、この2組の異形態間の音韻的關係はまだ説明していない。動詞型助詞=daと語幹=dar-/dat-の關係も説明していない。

「よむ」と「て」における現象は、他の比較的多くの子音語幹動詞にも見られる。例えば、

mat·u-matte kaw·u-katte¹³ her·u-hette sawag·u-sawaide
sak·u-saite yob·u-yonde

もしこれらの「て」語形を上記のIAモデルにしたがって分析するならば、次のような結果になるだろう。

mat·u-mat·te kaw·u-kat·te her·u-het·te
sawag·u-sawai·de sak·u-sai·te yob·u-yon·de

この場合、これらの動詞は次のような語幹の異形態を持つことになる。

{mat-, mati-}, {kaw-, kawi-, kat-}, {her-, heri-, het-}, {sawag-, sawagi-, sawai-},
{sak-, saki-, sai-}, {yob-, yobi-, yon-}

また、「接続」の接尾辞「て」は次の異形を持つことになる。

{-te, -de}

「だ」の問題に関しては、=dar·ooや=dat·taのような形態や/r/を語幹子音に持つ動詞の類似性から、語幹は=dar-であると推定できる。この場合、IAモデルでは次の二つの説明が考えられる。

- 1) =daは=dar-と=dat-という語幹の異形を持つ。したがって、非過去の形態素はマイナス形態-r(語幹からrを除く)となる。
- 2) =daは語幹の異形=da, =dar-, =dat-を持つ。したがって、非過去の形態素はゼロ形態- \emptyset である。

この分析については次のような問題点が指摘できる。

- 1) 語幹と接尾辞との間の位置関係、つまりどれが基本的で、どれが派生なのかが明らかにされていない。
- 2) 線状的な分析しかできないIAモデルでは、すべての語形が膠着の結果としてしか表されないが、例えば、kaw·u-kat·teやsawag·u-sawai·de等には、明らかに単なる膠着とは異なった形態音韻論的なプロセスが働いている。
- 3) 「ゼロ形態」や「マイナス形態」のように、実際の表層的な現象のレベルで存在が証明できない形態の単位を導入するのは、記述として非合理的である。

このような点にIAモデルの限界が見られる。線状的な分析だけでは記述できない形態音韻論的なプロセスを記述するためには、より動的な方法論が必要となる。IAモデルから発展したItem and Process (IP) モデルはその手段を提供するものであり、以下ではこの方法論にもとづいて日本語の形態論的記述をおこなったRickmeyer (1993, 1995) にもとづいて議論を進める¹⁴。

リックマイヤーは歴史的な証拠にもとづき、各形態単位に基本形があり、他の異形は特定な形態音韻論的なプロセスによって生じたものであることを示した。現代日本語には音韻同化、融合、音韻交代という三つのプロセスが働いているが、上であげた語形ではその中の二つしか働いてい

ない。

1) 音韻同化

関係する形態に音韻同化が起こるが、音韻同化の結果である語形中の形態間の境界線は明確である。(ここでは音韻同化を「逆行同化」と「相互同化」に分ける。Lewandowski 1994:98 参照)

- a) 逆行同化 : mati·te → mat·te [ti·t > t·t]
kawi·te → kat·te [wi·t > t·t]
heri·te → het·te [ri·t > t·t]
kaki·te → kai·te [ki·t > i·t]
- b) 相互同化 : yobi·te → yon·de [bi·t > n·d]
yomi·te → yon·de [mi·t > n·d]

2) 融合

音韻同化と異なり音韻素を個々の形態に明白に分けることができず、形態間の境界線が明白ではない。

- sawagi·te → sawaide [gi·t > id]
=dar·u → =da [r·u > φ]

この分析により、上記の三つの問題が解決されている。例えば、動詞「さわぐ」の場合、語基 sawagi- は語幹 sawag- を /i/ で拡張した形と認められるが、「さわいで」では語基「さわぎ」と「て」が融合を起こしている。これは現代語における形態記述というだけではなく、歴史的事実でもある。また、「へる (減る)」の場合も、語基 heri- は語幹 her- を /i/ で拡張した形だが、「さわいで」とは異なり、「へって」の語幹 het- の異形は続く接尾辞 -te における子音 /t/ への子音同化によって生じているのであり、「さわいで」で起こる形態音韻論のプロセスとはやや異なる。音韻同化は膠着的なプロセスに含まれるが、融合は融合的 (屈折的) なプロセスであるので、上のような記述は直接日本語の形態類型論的な記述につながるという利点もある。「ゼロ形態」あるいは「マイナス形態」のような恣意的な形態素をたてる必要がない。

5. 分析結果のまとめ

以上、日本語の動詞形態論の中心をなす語形の分析をおこない、語を構成する要素各々の位置づけと異形間の形態音韻論的關係について論じた。以下にその結果をまとめる。

(略号 : V 動詞語幹, N 名詞, f 活用語尾, vc 動詞型接尾辞 (子音語幹), vv 動詞型接尾辞 (母音語幹), a 形容詞型接尾辞, p 活用しない助詞, pv 動詞型助詞, pa 形容詞型助詞, Ass (assimilation) 音韻同化, Fus (fusion) 融合)

1. 1つの語彙素 (語幹) と活用語尾, 派生接尾辞からなる語形

1.1. 動詞語幹+活用語尾

V·f : yom·u, yom·e, yom·oo, yom·eba

V[Ass]・f : yon・da, yon・de, yon・dara

1.2. 動詞語幹／語基＋派生接尾辞＋活用語尾

V.vc・f : yomi.mas・u

V.vv・f : yom.are・ru, yom.ase・ru

V.a・f : yom.ana・i

2. 「語句」(語＋助詞)

2.1. 動詞の活用形＋活用しない助詞

V・f=p : yom・u=to, yom・u=na, yom・u=ga, yom・u=mai

2.2. 動詞の活用形＋活用する助詞

V・f=pv・f : yom・u=dar・oo

V・f=pa・f : yom・u=rasi・i

2.3. 動詞の活用形＋活用しない助詞＋活用する助詞

V・f=p=pv[Fus]f : yom・u=soo=da, yom・u=no=da

3. 2つ以上の語彙素と活用語尾からなる複合語(複合動詞)＋活用語尾

V-V・f : yomi-hazime・ru, yomi-owar・u, yomi-aw・u

4. 2つ以上の語／語句からなる統語的構成体

4.1. 連続動詞(動詞の活用形＋動詞の活用形)

V[Ass]・f V・f : yon・de ir・u

※話しことばにおいては、動詞の語幹＋派生接尾辞＋活用語尾

V[Ass].v・f : yon.de・ru

4.2. 動詞の活用形＋名詞(または名詞的助詞)＋活用する助詞

V・f N=pv[Fus]f : yom・u hazu=da, yom・u mono=da

(または V・f=p=pv[Fus]f : yom・u=hazu=da, yom・u=mono=da)

第3節では、動詞語形のパラダイムにおいて、動詞に後続する要素は次の順で中心的であると主張した。

活用語尾 > 活用語幹を形成する派生接尾辞 > 活用語幹を形成する助詞

それぞれの類がほぼ同じ分布を共有するパラダイムをなす。これは語形全体のパラダイムとして示すこともできるが(例:よむ, よめ, よもう...), 後続要素だけのパラダイムとしても示すことが可能である。ここでは、上の分析で扱わなかったものも含めて、上記の類に属する後続要素だけのパラダイムを簡単に示す。また、表記に関しては、形態音韻素を大文字であらわす(不規則動詞(クル, スル等)における後続要素の異形, ならびに文章語的表現(ベキ, ザル等)は省略する)。

1. 活用語尾

・(r)u (非過去), ・(r)eba (条件), ・(y)oo (意志・推量), ・e, ・ro, ・yo (命令)

・(a)zu (否定)

・Te (接続), ・Ta (過去), ・Tara/・Taraba (条件), ・Tari (例示)

2. 活用語幹を形成する派生接尾辞

2a. 動詞語幹を派生するもの

2a-1. 語幹に接続するもの

.(r)are·ru (受身・可能等), .(r)e·ru (可能), .(s)ase·ru (使役), .(s)as·u (使役)

.(a)n·u (否定)

2a-2. 語基に接続するもの

.mas·u (丁寧), .yagar·u (軽蔑), .u·ru/.e·ru (可能), .kane·ru (不可能)

2b. 形容詞語幹を派生するもの .(a)na·i (否定), .ta·i (願望)

3. 活用語幹を形成する助詞

3a. 動詞語幹を派生するもの =da (dar·u→da), =des·u

3b. 形容詞語幹を派生するもの =rasi·i

動詞の活用・派生体系を連続的なものと見るならば、次のものはいくつかの形態・統語・意味論の特徴からして通常の統語的構成体や複合語より動詞の活用・派生体系に近いと言えよう。

4. 話しことばにおいて統語的構成体から接尾辞へ移行しつつあり、生産的に多くの動詞に後接するアスペクト形式。

～テイル>～テル (V·Te i·ru > V·Te·ru)

～テシマウ>～チマウ, ～チャウ (V·Te simaw·u > V·Tima·u /V·Tya·u)

5. 複合動詞の後項動詞で、本来の語彙的意味が薄らぎ、生産的に多くの動詞に後接するアスペクト形式。「～ハジメル」「～オワル」「～ツヅケル」等。

6. 動詞に後接する形容詞で、単独で使われる場合と異なる意味を持つようになり、生産的に多くの動詞に後接するムード形式。「～ヤスイ」「～ニクイ」等。

なお、連続性があると認められれば、様々なパラメータを用いて、このリストを他の項目に対して拡張することも可能であるが、1. から3., その中で特に1. と2. が動詞の活用・派生形態の中心をなすという点は変わらないと思われる。

また、1.～3. の類と4.～6. の類との違いは、前者は明確に限定できるのに対して、後者は、「～テイル」「～ハジメル」のように派生接尾辞化するものと、「～テアル」「～ソメル」のように派生接尾辞化しないものがある。この点、1.～3. の完全に文法化したものと、4.～6. のように基本的に統語的もしくは語彙的であるものの大きな違いがある。

本論文で言及したいいくつかの文法書のなかで、動詞の活用・派生体系においてほぼ同じ結果を示しているのは、J.リックマイヤー氏 (Rickmeyer 1995) と鈴木重幸氏 (鈴木1996) のものである。これ以外の文法書の分析には多かれ少なかれ重大な問題点があると思われる¹⁵。

本論文で提示した分析は、誰でもこの手続きを点検して実際の形態をもとに客観的に検証することができる。また、特定の統語論や語彙論のモデルを前提としないので、いろいろな文法モデルにおいて使用することもできる。

また、形態論において何を基本単位とするかにかかわらず、この分析は利用できる。「語」を基本単位とした場合は、ここでの分析は語の内部構造の分析ということになり、語のパラダイムは文法範疇にもとづいて別に整理されることになる。一方、「形態素」を基本単位とした場合は、ここでの分析はそのままパラダイムを示しているということになる。この点は、WPモデルの問題点について議論した際も問題にしたが（第2節）、筆者自身は、以下の二つの理由により、「形態素」より「語」を形態論の基本単位と考えた方がよいと考えている¹⁶。

- 1) 形態素と形態素が合成してできた「語」には、単なる形態素の加算として説明できない意味があることが多い（影山1993:8 等参照）。このことは活用のレベルでも示すことができる（鈴木1996:39f. 参照）。
- 2) 語形のパラダイムの歴史的な変遷は形態素ではなく、語にもとづいているものとしてしか説明できない（Wurzel 1997 参照）¹⁷。つまり、人間の認知に実在するのは「形態素」ではなく「語」のパラダイムである。

しかし、個々の形態素（または語形形成プロセス）そのものにはまったく意味がなく、意味は語全体にしかないという主張にも賛成できない。もし各単語の意味がすべて各語形に固有で、形態素または語形形成プロセスからは演繹できないということになれば、人間の記憶にとって負担が重すぎるからである。したがって、日本語のように、ラテン語などに比べて語形の構成要素による活用・派生がきわめて規則的な言語においては、「語」を基本単位と考える一方で、「形態素」の概念も利用するというのが合理的であると思われる。

6. 「形態素」は文法のどのレベルに位置づけるべきか

前節では本論の分析のまとめを示したが、ここで形態単位自体の位置づけについて少し補足しておきたい。

上の分析によって得た語の構成要素のなかで、同じ意味・機能と似た音韻構造を持ち、相補的に分布しているものを形態素と呼んだ。例えば、「ミタ」の「タ」と「ヨンダ」の「ダ」は別々なものではなく、同じ形態素の異形とする。しかし、実は、「タ/ダ」という形態素を文法のどのレベルに位置づけるべきか（形態レベルに位置づけるか、文法範疇レベルに位置づけるか）という問題がある。

両者の違いは表層レベルと抽象レベルの関係づけ方の違いである。まず、形態レベルに位置づけた場合、「た/だ」{-ta, -da} は -Ta で代表させ（「T」は形態音素を表す）、「T」が形態音韻的な環境により /t/ か /d/ として実現されると説明することになる。一方、意味・機能にもとづく文法範疇レベルに位置づけた場合は、「タ/ダ」{-ta, -da} は「過去」という意味・機能をもった形態素の異形ということになる。前者の方が適切であることは、一言語の記述においても、言語間の比較においても証明できる。

形態素を意味・機能のレベルで定義すると、パラダイムの中であるカテゴリーがある単語において有標形をとり、ある単語において無標形をとることは、「無標形の場合はゼロ形態素を含む」という形で説明しなければならない。例えば、このような方法論を用いたブロックの「語基」の

分析はそうになっている (Miller 1970: 9 参照)。

yomi = yom- + -i = {yom-} + {Inf}

mi = mi- + -φ = {mi-} + {Inf}

日本語の形態体系は膠着的な要素が多く、形態と意味が1対1対応することが多いので、このような問題はそれほど頻繁に起きないが、ラテン語やドイツ語のように複数の文法カテゴリーを1つのマーカーで表したり、マーカーと文法カテゴリーとの対応関係が不透明であったりする言語では、形態素を意味・機能のレベルで定義する分析は深刻な問題をもたらす。

形態素を意味・機能のレベルで定義することの問題点は言語間の比較においても明らかである。ドイツ語の話しことばで「ミタ」に相当するのは「gesehen haben」という二つの語からなる統語的構成体である。ここで「過去」という意味に関与する形態素は、haben の語幹 hab-, gesehen の接頭辞 ge-, 接尾辞 -en の3つである。仮に形態素を意味・機能のレベルで位置づけるなら、「gesehen hab-」と「ミタ」は同じ形態構造を持つということになる (すなわち「sehen'/見る」+「過去」)。しかし、gesehen haben と「ミタ」は、ほぼ同じ意味を表している、形態的には前者の方が明らかに複雑であり、形態論ではまさにこのことを記述しなければならない。したがって、言語間の比較においても、語の構造を意味・機能のレベルで記述するだけでなく、形態素を形態のレベルに位置づけることも必要なのである。

7. 言語間比較への応用

最後に、本論で提示した分析を形態に関する言語間比較に応用してみたいと思う。

様々な言語の語形の構造を比較する場合、1) 「語」が基本単位であり、2) 各語形はある「基本形」にもとづいており、3) その基本形に形態音韻的なプロセスが加えられることによっていろいろな文法範疇が表現される。

ただし、ここで「基本形」と呼ぶのは具体的な形式として出現するものではなく、抽象化された語幹である。例えば、servus, servi, servo, servum... (「奴隷」の単数主格, 単数属格, 単数与格, 単数対格) のようなラテン語の語形のパラダイムでは、どの語形にも格を表す接尾辞が既についている (つまり接尾辞付加という形態論のプロセスが既に働いている) のであり、例えば主格形式を「基本形」と呼ぶのは形態的な根拠のない恣意的な判断に過ぎない。日本語の活用形についても同じことが言える。例えば、動詞の非過去 (現在・未来) 形を「基本形」と呼ぶこともできるが、非過去形には既に非過去を表す活用語尾 {-u, -ru} が付加されている。したがって、動詞の形態的な比較のためには、抽象化された語幹を「基本形」としなければならない。

以下では、「読む」動作を表す日本語、ドイツ語、英語の動詞を例として、基本的なテンス・アスペクトの意味を表す活用形または統語的構成体の形態的な比較をおこなう。動詞の各語形 (表では1.) の構造を明らかにするためには、「語幹」(表では2.), 「音韻構造と線状的形態構造」(表では3.), 「語構成に働く形態類型論的プロセスのすべて」(語内部の音韻交代などを含む。表では4.), そして「意味機能的構造」(コンテキストから切り離された抽象的な意味。実際の意味用法はコンテキスト中でしか現われない。表では5.) を記述する必要がある。具体的には次のようになる¹⁸。

(略号：ST(stem) 語幹, f 活用語尾, s(suffix) 接尾辞, pr(prefix) 接頭辞, Agg(agglutination) 膠着, AssAgg(assimilative agglutination) 音韻同化を伴う膠着, Fus(fusion) 融合, Suppl(suppletion) 補充, If(intraflexion) 語内活用(語内音韻交代), PAST 過去, NPAST 非過去, PERF 完了, CONT 進行, 1P 1人称, SG 単数, ・語幹と活用語尾の境界, . 語幹と接辞(接頭辞, 接尾辞)の境界, / 統語的単位の境界)

1. <よむ>	<(ich) lese>	<(I) read>
2. yom-	le:z-	ri:d
3. yom·u (V·f)	le:z·ə (V·f)	ri:d (V)
4. ST[Agg]f	ST[Agg]f	ST
5. 'yomu'+[NPAST]	'lesen'+[1P]+[SG]	'read'

1. <よんだ>	<(ich) habe gelesen>	<(I) read>
3. yon·da (V·f)	ha:bə gə+le:z.ən (V·f/pr.V.a)	red (V)
4. ST[AssAgg]f	ST[Agg]f/pr[Agg]ST[Agg]s	ST[If]
5. 'yomu'+[PAST]	'lesen'+[PERF]+[1P]+[SG]	'read'+[PAST]

1. <よんでいる>	<(ich) lese>	<(I) am reading>
3. yon·de i·ru (V·f/V·f)	le:z·ə (V·f)	əm ri:d.iŋ (V/V.a)
4. ST[AssAgg]f/ST[Agg]f	ST[Agg]f	ST[Suppl]/ST[Agg]s
5. 'yomu'+[CONT]	'lesen'+[1P]+[SG]	'read'+[CONT]+[1P]+[SG]

ただし、語彙的な意味にしても、文法的な意味にしても、動詞の意味はそれぞれの言語において異なる。「読む」という動詞ひとつとっても、「現在形」「過去形」「進行形」といった語形の意味が言語によってかなり異なる可能性がある。また、語形のなかにマークされていない意味を記述するのは適切でないと考えている。例えば、英語の動詞 read そのものには「人称」をマークするカテゴリーが存在せず、平叙文では義務的である主語(人称代名詞)によって「人称」のカテゴリーが文の中で表されると考える。

このようにして多くの言語の語形の形態的構造と形態的特徴を記述できると思われる。

注

- 1 yomu-soo da, yomu-no da は IIa), yomu hazu-da, yomu mono-da は IIc) に分類される。「ものだ」「はずだ」は「そういうものだ」「そのはずはない」のように名詞修飾成分の前接を許す(その意味で「もの」「はず」は名詞としての特性を保持している)が、「そうだ」「のだ」はそのような成分の前接は許さない。したがって、「そうだ」「のだ」は明らかに付属語といえるが、「ものだ」「はずだ」は付属語とはいえない。

- 2 ドイツ語においては複合動詞は日本語に比べてきわめて非生産的だが、日本語と同様、複合動詞の意味は各動詞の意味の加算としては説明できない。例：kennen-lernen（知っている+習う>知り合う）
- 3 「～始める」「～終わる」等の複合動詞を動詞の活用・派生体系に含める文法書（高橋太郎他1995）ではその理由は明らかにされていないようだが、おそらくこれらの形式のアスペク的な意味ならびにその生産性がその理由だろう。しかし、ひとつの言語の中でも同じ意味を表す文法範疇が異なる形態で表されることがある。したがって、意味による形態分類は形態構造を無視することにつながりかねない。また、生産性を分類のパラメータにたてるのであれば、コーパスを利用するなどして、それぞれの複合動詞の生産性を具体的に調査する必要があると思われるが、複合動詞の中で「～始める」「～終わる」がどの程度の頻度で用いられているかははっきりしない。ただし、「活用－派生－複合」を連続体とみなし、「形態」「意味」「頻度」等の複数のパラメータをたてて調査すれば、「～始める」「～終わる」等は派生接尾辞に近い複合動詞の後項動詞であることが証明できるかもしれない。もしそうであれば、これらの複合動詞は動詞の活用・派生体系には含まれないにせよ、その周辺にあるものとはいえるだろう。
- 4 「～ている」は話しことばでは「～てる」と短縮されることがあるが、この場合「～てる」は接尾辞化している（「知ってはいる」とは言えるが「*知ってはる」とは言えない）。よって、実際は連続動詞と接尾辞は連続体をなしているといわざるをえない。また、「動詞+テ」に続く動詞がどの程度接尾辞化しているかについても差があるようである（例えば、「食べている」は「食べてはいる」と言えるが、「食べてしまう」は「*食べてはしまう」とは言えない）。したがって、連続動詞は、動詞の活用・派生体系の中心に属する語形とは認定できないが、その周辺にあるものであることは確かである。
- 5 寺村（1984）は、「はずだ」「ものだ」を助動詞、すなわち「活用する付属語」（寺村1984: 50）とするが、注1で述べたようにこれらは付属語ではない。「もの」「はず」を形式名詞と見る説もあるが、動詞に後接した場合、普通の名詞より独立性が低いので名詞的な接尾辞、あるいは語中の位置からいえば名詞的な助詞と見ることもできよう。いずれにせよ、「はず」「もの」は、普通の名詞よりは動詞の語形体系に近い位置にあるが、その中心をなす「動詞的な語形」には含まれないはずである。
- 6 日本語形態論の中では、鈴木重幸氏と高橋太郎氏のものが WP モデルの特徴をもっていると思われる。しかし、特に前者は詳細な内的分析を行ない、伝統的な WP モデルの枠組みを越えていると思われる。
- 7 日本語文法論の中では、清瀬とブロックがこのようなモデルを使用していると思われる。
- 8 条件を表す助詞「to」が動詞に後接した「yomuto」全体を動詞の活用形とみなす見方もあるようである。それは、条件の「to」が活用語の非過去形にしかつかないからであろう。この見方にもとづけば、「読むといい」「ないと困る」「そうだといい」のような「to」は、「読むと（yom-uto）いい」（動詞+活用語尾）、「ないと（na-ito）困る」（形容詞+活用語尾）、「そうだと（soo-dato）いい」（副詞+助詞(?)）のように、それぞれを独立した形態として認めることになる。また、「よもうと、よむまいと」や「よもうとする」のような譲歩の「to」も、前接する形態が -(y)oo, -maiに限られるので、同じように「yom-ooto; yom-umaito」のように分析することになる。その結果、次のような形態単位を得ることになる。

to（助詞）「引用」、to（助詞）「随伴」…

-(r)uto（活用語尾）「条件（動詞）」、-ito（活用語尾）「条件（形容詞）」、

-dato (助詞)「条件 (非活用語)」

-(y)ooto (活用語尾)「譲歩」, -(r)umaito (活用語尾)「否定譲歩」...

これに対して、私がここで提案するのは次のような分析である。

to (助詞)「引用, 随伴, 条件, 譲歩 等...」

前者の形態分析が必要以上に形態単位が多く、後者の分析の方がはるかに合理的であることは明らかであろう。(なお、条件の「to」が活用語の非過去形にしかつかないことは、文法モデルによっては、統語論 (可能な補文の条件) または形態論 (「to」の機能) で記述される。)

- 9 -daroo は動詞・形容詞につくが、-da, -datta などとはつかない (yomu-daroo, *yomu-da, *yomu-datta ...) という分布の違いを根拠として、-daroo を-da の活用形ではなく独立の接尾辞とみなす説もあるようである。もし -daroo を独自の接尾辞と認めれば、次のような形態単位を得る。

-da (助動詞 (または活用助詞)), -daroo (接尾辞)

これに対して、本論で提案する分析では次の形態単位を得る。

-da (助動詞 (または活用助詞)) (-daroo は -dar- + -(y)oo と分析する)

本論の分析は、形態単位を必要以上にふやさないと利点がある。また、-da と -daroo を別の形態素として分析するのは、活用語 (動詞, 形容詞) における分布の違いを説明するには都合がよいが、両者が同一のパラダイムを構成する「活用しない語+だ, 活用しない語+だろう」(例, 本だ, 本だろう) についても、-da と -daroo を別の形態素として分析せざるをえなくなるという問題がある。(活用語につく -daroo と活用しない語につく -daroo を別の形態素とするのはさらに非合理的である。)

- 10 -r-, -s-, -i- の類は、歴史的には実はリエゾンの音韻素であったという可能性は十分にある。しかし、共時的な記述においてそのようにみなすことは有利ではない。

- 11 異形の完全なリストは未完成である。

- 12 清瀬義三郎氏は「日本語は膠着語であり、屈折語ではない」(Kiyose 1995:160f.) として日本語に活用を認めていないが、この考えには重大な過ちがあると思う。言語全体を一つの形態論的タイプに分類することは最近では否定されており、むしろ一つの言語においても複数のタイプの形態論的手段が使われると見ることが多い。日本語においても品詞によってかなりの差が見られる。例えば、副詞は「孤立」的なものが多いのに対して、動詞においては「融合」的な現象さえ見られる (Narrog in press も参照)。また、コムリー (Comrie 1989:45) も「膠着的言語も融合的言語も活用を持つことにおいて孤立言語とは異なっている」と明確に述べ、「活用」を連想させる「屈折語」という用語より「融合語」という用語を使用した方がいいと指摘している。

- 13 「かう」ka·u の語幹は半子音 /w/ で終わる。/w/ は kaw.ana·i のように /a/ で始まる語形が続く場合に現れる。

- 14 鈴木(1972)や Kiyose(1995)等の文法論にも動詞の音便現象の記述はあるが、リックマイヤーのような体系的でしかも類型論的な説明はない。例えば、Kiyose (1995: 40, 48) では動詞の音便が音韻交代であるかのように記述されており、「だ」についての説明もない。鈴木(1972: 322)も音韻交代であるかのように記述しており、注でその歴史的な由来を紹介するだけにとどまっている。

- 15 清瀬(1995)の問題点は第2節と注8で述べた。高橋(1995)については、第2節で複合動詞の扱いや「動詞+助詞」の扱い等に関する問題点を述べた。管見によれば、前者は「つくり」の面、後者は「はたらき」の面にかたよりすぎている。ブロックの形態論 (Miller 1970) の問題点については第6節で述べる。寺村(1984)については直接言及しなかったが、ブロックのIAモデルにもとづく活用の記述と機能的に解釈された派生 (助動詞) の体系との間にギャップがある点が問題と思われる。

る。(例えば、二つの形態素からなる「ものだ」、「はずだ」等を「助動詞」とみなしている点において、この矛盾が見られる。) 活用と派生はまったく異なるルールにしたがうという主張は十分可能であるが、その点に関する説明はなされていない。ただし、以上はあくまでそれぞれの形態論の問題点に簡単にふれただけであって、全体的な評価というわけではない。

また、橋本進吉の形態論にもとづくいわゆる「学校文法」に対する批判は、寺村(1984)、Rickmeyer(1986)、鈴木(1996)を参照されたい。学校文法の形態論は平安時代の中古語にもとづくが、Rickmeyer(1986)は、中古語の動詞活用を基準にしても、活用の定義と実際の分析とがほとんどの場合一致しないことを示している。寺村(1984:27ff.)も、活用形の認定、定義、命名が無原則で一貫性がないなどの点を指摘している。

なお、鈴木(1996)とRickmeyer(1995)は本論文とほぼ同じ結果を示していると述べたが、これらの形態論と本論文との間には相違点もある。ただし、その相違点は動詞の「形」の分析においてはそれほど重要ではないと思われるので、ここでは特にふれない。

- 16 ただし、この二点は必ずしもすべての言語にあたっているとは限らない。言語によって「形態素」を基本単位と認めた方が適切であることもある。例えば、多くの品詞で統語的な独立性があまりにないというフランス語に対してこのような主張がなされているし (Schwegler 1990:46 を参照)、一語が一文に相当することがあると言われる「抱合的」な言語 (cf. Malmkjær 1991:273) においても形態素を基本単位とした分析の方が適切かも知れない。
- 17 ゴットホルストの主張はゲルマン諸語における歴史的証拠にもとづくものであり、他の言語においてこの原則が働かない可能性はもちろんある。
- 18 ドイツ語と英語の分詞語尾は暫定的に形容詞的派生接尾辞とみなしたが、その形態・統語論的機能は複雑なので、これは最終的結論ではない。

参考文献

- 影山 太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 鈴木 重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- (1989) 「動詞の活用形・活用表をめぐって」 『ことばの科学』 2, 109-134 むぎ書房
- (1996) 『形態論・序説』 むぎ書房
- 高橋 太郎 ほか (1995) 『日本語の文法』 星和出版
- 寺村 秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』 くろしお出版
- 長嶋 善郎 (1975) 「複合動詞の構造」 『日本語講座4: 日本語の語彙と表現』 大修館書店 (斎藤倫明・石井正彦編1997 『語構成』 (ひつじ書房) に再録)
- 松村 明 編 (1971) 『日本文法大辞典』 明治書院
- Anderson, Stephen (1992) *A-Morphous Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press
- Bauer, Laurie (1988) *Introducing Linguistic Morphology*. Edinburgh: Edinburgh University Press
- Bybee, Joan (1985) *Morphology*. Amsterdam: Benjamins
- Comrie, Bernard (1989) *Language Universals and Linguistic Typology*. Chicago: Chicago University Press
- Frawley, William (1992) *Linguistics Semantics*. Lawrence Erlbaum Associates
- Kiyose Gisaburo N. (1995) *Japanese Grammar — A New Approach*. Kyoto: Kyoto University Press

- Lewandowski, Theodor (1994) *Linguistisches Wörterbuch* 1-3. Heidelberg: Quelle & Meyer
- Malmkjær, Kirsten (1991) *The Linguistics Encyclopedia*. London: Routledge
- Matthews, P.H. (1991) *Morphology*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press
- Miller, Roy Andrew (1970) *Bernard Bloch on Japanese*. New Haven: Yale University Press
- Narrog, Heiko (in press) : Morphologisch-typologische Überlegungen zum Japanischen im Vergleich zum Deutschen und Chinesischen in: Nitta Haruo, Shigeto Minoru und Götz Wienold (Hrsg.) : *Beiträge zur kontrastiven Linguistik Japanisch-Deutsch*; München: Iudicium
- Rickmeyer, Jens (1986) *Verbal Inflexion and Auxiliary Verbs in Japanese*; in: *BJOAF* 9. 217-228; Bochum: Brockmeyer
- (1993) Verwandt, jedoch verschieden: Japanisch und Ryukyu Betrachtungen zur Genealogie und Typologie beider Sprachen. *BJOAF* 16. 23-38
- (1995) *Japanische Morphosyntax*. Heidelberg: Julius Groos
- Schwegler, Armin (1990) *Analyticity and Syntheticity*. Berlin: Mouton de Gruyter
- Wurzel, Wolfgang (1997) Morphologische Eigenschaften im Lexikon — Diachronische Evidenzen. Paper on the 30th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea. 24/8/1997

付 記

本論文は私の博士論文「Verbflexive und Verbalsuffixe (動詞の活用語尾と接尾辞)」(Bochum 1997, 未公刊)の一部にもとづくが、独立の論文とするにあたって内容的に多少の変化が生じた。その際、鈴木重幸氏、鈴木泰氏、エリック・ロング氏、柳沢治氏には、内容及び日本語の表現について貴重な指摘をいただいた。記して感謝を述べたい。

(投稿受理日：1997年11月19日)

Heiko Narrog

北海道大学言語文化部

060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

The inflection system of Japanese verbs

Heiko NARROG

Hokkaido University

Keywords

morphology, Japanese verbs, inflectional system, morphological typology

Abstract

Different morphological theories have produced a variety of opinions about the nature of verb inflection and derivation in Modern Japanese. This paper is an attempt to give an account of Japanese verb inflection and derivation that can be easily verified and be integrated into different grammatical theories. My starting point are verb forms taken from five recent grammars of Japanese. In Chapter 1 I examine which of these forms belong to the core of verb morphology. Those forms that do are further analyzed into their constituents in Chapter 2 and in Chapter 3 these constituents are classified according to their morphological status. In Chapter 4 sandhi phenomena in Japanese verb inflection are discussed. In the following chapter a list of the constituents of Japanese inflectional and derivational verb forms is presented as the result of the analysis in this paper. In Chapter 6 I argue for the placement of the term *morpheme* on a morphological rather than a semantic level. According to this list the inflectional endings form the core of Japanese verb morphology and there is a continuum extending to derivational suffixes and inflecting particles. Also, there are syntactic constructions and compounds that do not belong to the core of verb inflection and derivation but are close to it on the continuum and partially seem to be about to pass into it. The results of the analysis support the analysis both in the morpheme-based morphological model of Jens Rickmeyer and the word-based morphological model of Shigeyuki Suzuki, while other grammars taken as the starting point exhibit major shortcomings. Although there is evidence that *word* is the more basic morphological unit cross-linguistically, I argue that in the case of Japanese it is useful to also operate with the term *morpheme*. In the last chapter the morphological analysis and concepts presented in the previous chapter is applied to a comparative analysis of verb forms of Japanese, German and English.